

## 周作人が魯迅を回想して林紓に言及する 日本語訳注釈について

沢本香子

梁啓超「論小説与群治之關係」からはじまる。「群治」とは、なにを意味しているか。

### 周作人と松枝茂夫の往復書簡

梁啓超が使用したこの「群治」は、現在ではすたれてしまった。使用されることは、ほとんどない。日本では「政治」だと理解する研究者が多い。日本語訳として「政治」をあてるのだから明らかだ。

しかし、「政治」という訳語は不適當だというのが結論である（樽本照雄「梁啓超「群治」の読まれ方」1997）。

それでは、なにか。「社会」にほかならない。

私が10年以上も前の文章を持ち出すのは、最近、周作人と松枝茂夫の往復書簡が公開されはじめたことを知ったからだ。

小川利康編「周作人・松枝茂夫往来書簡 戦前篇（2）」（早稲田商学同致会『文化論集』第31号2007.9電字版）である。

該当する原文を引用する。

19380827Z【周作人 尤炳圻 松枝茂夫】

平白兄：

昨日別后又想起松枝君譯稿中，梁任公「論小説與群治之關係」（割注：大約在 / 末一章）處，將群治註作デモクラシ，似不妥，其時尚無此語，所謂群治實只是社會或社會生活之意耳。如校稿尚未交出，請為改正。專此奉，順頌

大安 作人啓

廿七日（62頁）

梁啓超原文の「群治」は、日本語に訳せば「社会」あるいは「社会生活」になる。「デモクラシ」とするのは妥当ではない。これが周作人の考えだ。

このような日本語訳の問題が、なぜ周作人の手紙にでてくるのか。

理由は、簡単である。松枝が翻訳した周作人の原文に、魯迅を回想した文章が含まれているからだ。そこで言及されている。魯迅は、梁啓超が日本横浜で創刊した雑誌を読んでいる。兄樹人が読むものなら、弟作人も読んだだろう。当時、流行していた林紘の翻訳にも言及するのだ。

小川利康が注で簡潔に説明している。関係する部分のみを引用する。

手紙文中の梁啓超「論小説与群治之関係」とは、「關於魯迅（其二）」で周作人が言及するものを指す。この作品を松枝は『周作人隨筆集』（改造社）『瓜豆集』（創元社）の二冊に収録している。改造社版では文中指摘するとおり「群治」に「デモクラシー」とルビを打ってあるのに対し、創元社版では周作人の意見を踏まえて「群治（社会生活）」に改めた。31頁

「群治」は、「デモクラシー」ではなく「社会生活」だ。周作人は正しく認識している。私は、そう判断する。松枝が周作人の意見に従ったのはそれでよかった。

ところが、ここから問題がふたつ出現する。

ひとつは、竹内好が梁啓超の「群治」を2種類に翻訳する。

原語の「群治」とするのは、『魯迅』（日本評論社1944.12.20 / 1946.11.1第2刷。創元社1952.9.5創元文庫。未来社1961.5.20 / 1968.10.10第二刷）だ。

もうひとつは、「デモクラシイ」「デモクラシー」と訳している（『魯迅』世界評論社1948.10.10。115、256頁）。同様に「小説とデモクラシイの関係論」と書く（『魯迅入門』東洋書館1953.6.10。101頁）。

ふたつを並置している。どちらかにしたというわけではなさそうだ。

松枝と竹内の間柄だ。竹内は松枝の翻訳を読んでいるだろう、と私は思う。松枝も注意しなかったのか。周作人が「社会」「社会生活」と手紙で知らせてきた、と。ところが、竹内は「群治」と「デモクラシイ」のままである。竹内が改めないのに

はなにか理由があったのであろうか。

もうひとつは、ずっと後に刊行された松枝自身の単行本だ。

周作人著、松枝茂夫訳「魯迅について その二」（『周作人隨筆』富山房1996.6.28）である。こちらでは、以前の訳語とは別のものを提出している。すなわち、「小説と政治との関係を論ず」（278頁）にしてしまった。以前の正しい「社会生活」を「政治」に改めている。どうしてそうしたのか、よくわからない。松枝没後の出版だから編集者が勝手に改変したものか。それにしても、わざわざ誤ることはないだろう。

この話は、これ以上発展しない。前説を終り、本題にうつる。

周作人が魯迅を回想して書いた文章に、林紓が登場する。本稿で検討するのは、それにつけられた林紓に関する松枝らの注釈である。

#### 松枝茂夫の質問と周作人の回答

1930年代のことになる。

松枝茂夫は、周作人の隨筆集を翻訳していた。改造社から刊行されることになり、訳文の不明個所を解決する必要がでてくる。機会があり、周作人に直接問い合わせの手紙を日本語で書いた。そのなかのひとつが、魯迅についての回想文だ。

松枝の日本語訳でいえば「魯迅について 其二」である（初出は「關於魯迅之二」『宇宙風』第30期1936.12.1に掲載後『瓜豆集』1937に収録）。これが林紓に係してくる。

私が問題にするのは、松枝の翻訳と注釈だ。ゆえに、周作人の原文には触れない。松枝が周作人にあてた手紙で提出した質問は多い。林紓に関連する箇所のみを示す。

1937年11月5日付の書信から。（周松枝の往復書簡について以下の引用は、すべて上記小川論文による。頁番号は、雑誌左開き論文縦書きのため逆になる）

其二、

- |   |   |        |
|---|---|--------|
| イ、黒太子南征録  | } | 原著者，書名 |
| ロ、仙女縁   |   |        |
| ハ、白雪 <sup>ママ</sup> [雲]塔                         |   |        |
| 二、 <u>蠶</u> 俄的偵探談似的短篇小説、叫作什麼 <sup>ママ</sup> 尤皮的， |   |        |

( 尤皮とは外国語の譯書でせうか？ ) 68-67頁

魯迅が、林紘の翻譯書を好んで読んでいたことをのべる箇所だ。出てくる外国作品について原著者名と原書名が、松枝にはわからなかった。翻訳された書名だけでは、わからないのも無理はない。くわえて周作人の記憶が正しいかどうかも考慮する必要があるだろう。

この質問に対して同年11月22日付で周作人の回答がある。同じく、関係部分のみの引用だ。

露俄著偵探談，“尤皮”，日本譯作ユーベル，原文未詳（7）

又『黒太子（Black Prince）南征録』（割注：哈葛得（H.R Haggard）／著，原書名今已忘。）『仙女縁』等（8）原書未説明，不可考。65頁

文中に見える（7）（8）は、小川利康のほどこした注番号を示す。あとで検討する。周作人の回答を見ると、問題解決にはほど遠いように思う。彼は詳しくは覚えていないのだ。ユゴーの「ユーベル」がわかったくらいか。ハガードの名前もあるが、これは不正確な記憶だった。ほぼ30年前のことを思い出している。間違うのもしかたない。

#### 松枝茂夫の翻訳と注釈

周作人著、松枝茂夫訳「魯迅について 其二」（『周作人隨筆集』改造社1938.6.20）である。

以上の書簡をふまえて松枝は、以下のように翻訳した。

魯迅が影響をうけた人物として、最初は巖復と林紘がいる、という続きだ。

その次は林琴南\*で、『[巴黎]茶花女遺事』が出て後、出るたびにみな買った。確か最後の一冊は東京神田の中国書林で買った『黒太子南征録』だったと記憶するが、全部二三十種ぐらゐもあつたらうか。当時「冷血」の文章は非常にハイカラで、彼の訳述した『仙女縁』や『白雲塔』は私も今に荒まし覚えてゐる。そのほかユゴー（Victor Hugo）の探偵談みたいな短篇小説で『ユーベル』とか何とかいふのがあつたが、非常に面白く書けてゐた。55頁

とても有名な文章だ。魯迅が日本でも購入したくらいに林訳小説を好んでいた。林紘を擁護したい研究者が好んで引用する箇所だ。魯迅の威光を借りたいのだろう。それは皮肉な見方であるというなら、たんにその事実があったと書き直してもいい。ただし、民国になって魯迅は林訳から離れる。彼が五四時期の林紘を敵視するまでになったのは、これもよく知られた話だろう。

周作人が書いた文章だから、本人に確認した。にもかかわらず、わずかな回答しかえることができなかった。それにもとづいて以上のような日本語翻訳になった。周作人の手紙で利用されたのは、わずかに「ユーベル」だけだったとわかる。

引用文に見える「\*」印は、松枝がつけた注釈だ。

注五五 林琴南 林紘 (1852-1924)。字は琴南、別に冷紅生と署し、また冷血ともいう。泰西名著を訳した『林訳小説叢書』百数十冊があり、清末の文壇を風靡した。『[巴黎]茶花女遺事』は小ヂューマの『椿姫』であり、『黒太子南征録』はコナンドイルの小説、『仙女縁』及び『白雲塔』は原書及び原作者の名を記さず未詳。402頁

コナン・ドイルを補ったのは、松枝が調べた結果だと思われる。

前述のとおり魯迅を回想した文章として有名だ。よく知られているにもかかわらず、ここに出てくる人名書名についてとなると、説明がとたんにあやふやになるのはなぜだろうか。書いた周作人自身がはっきり記憶していないのだからしかたがないといえば、そうだが。しかし、林紘についての解説が不十分だといわざるをえない。解説者の力が入らないらしい。

「林訳小説叢書」が「百数十冊があり」と書くのは、誤りではないが正確でもない。正しくは、全100編186冊である。

松枝茂夫がおかした大きな間違いは、「冷血」を林紘にしてしまったことだ。冷紅生と「冷」が共通だから連想がはたらいて誤解したものか。だが、冷血は、陳景韓の筆名である\*1。このことは、日本では広く認知されていなかったらしい。竹内好が『魯迅』において後々まで「冷血」は彼(林紘)の号である(未来社1961.5.20 / 1968.10.10第二刷。77頁)と説明している。いや、現在もそうか。そういう扱いをされる作家だ。

上記の周作人引用部分は、林紘、冷血（陳景韓）、『ユーベル』というみつつの話題がただ並列されているにすぎない。結びつけているのは、単に翻訳だということくらい。林紘とユゴーといったところで、はみだすものがある。それを松枝は、すべて林紘に関するものだと勘違いした。だから、別人である冷血を林紘にしてしまった。

周作人は、1938年7月11日付書簡で改造社本を受け取ったと松枝に知らせている。冷血について松枝が間違っ理解している、と指摘してもいいところだ。だが、それをしなかった。

つぎは、日本語訳『瓜豆集』だ。

周作人著、松枝茂夫訳「魯迅に關しての二」（『瓜豆集』創元社1940.9.25）は、字句に少しの改変がある。だが、ほぼ同じだといっていいだろう。再度引用する。

その次は林琴南で、『[巴黎]茶花女遺事』（小ヂューマの『椿姫』）が出て後、出るたびにみな買った。確か最後の一冊は東京神田の中国書林で買った『黒太子南征録』（原著者原書名未詳）であつたと記憶するが、全部二三十種もあつたらうか。当時は冷血（林琴南）の文章は非常にハイカラで、彼の訳述した『仙女縁』や『白雲塔』は私も今に荒ましおぼえてゐる。そのほかユーゴー（Victor Hugo）の探偵談みたいな短篇小説で『ユーベル』とか何とか云ふのがあつたが、非常に面白く書いてみた。289-290頁

前著では注釈で説明していた一部分を本文に組み入れた。コナン・ドイルを削除したほかは、それほど変わっているわけではない。ただし、ドイルをなぜはずしたのかは不明だ。冷血については、林紘だと誤ったままである。

それにともない注釈が、書き換えられた。

注五五 林琴南孝廉 林紘、字は琴南、清末の拳人（孝廉と同意）、海外名著の翻訳『林訳小説叢書』百数十種あり、清末民初の文壇に新しい空気を吹込んだ功績は没すべくもない。しかし彼の頭は依然古く、翻訳の目的主旨は全然間違つてゐたため、遂に時代に取残された。383頁

林紘と林訳についての評価をつけ加えている。

林紓の翻訳はその功績を高く評価する。だが、「遂に時代に取残された」という。ここは、林紓に対する松枝自身の判断だ。

のちのことだが、増田渉も林紓について「歴史から置きざりにされてしまった」（1967）と書く。林紓が文学革命に反対した結果を指すのである。

これを読んだ日本の読者が、林紓についてよい印象をいただくのはむづかしいだろう。林紓は、時代に取り残され、歴史から置き去りにされた頭の固い老人だ、くらいにしか思わないのではなからうか。

林紓の翻訳は認めつつ文学革命期の林紓を批判するという典型を、ここに見ることが出来る。

松枝は、「『青木正児全集』に寄せて」（『松枝茂夫文集』第2巻研文出版1999.4.20所収）を発表している。青木の書いた論文に感激したと次のようにいう。「雑誌『支那学』に発表された「胡適を中心として渦いている文学革命」を読んだときの感激を忘れることができない。先生の書かれた文章に激発されて中国文学に志したものは決して私ひとりではなかったろう」126頁

その青木論文は、当然のようにして林紓に言及しているのだ（青木「胡適を中心に渦いてゐる文学革命（三、完）」『支那学』第1巻第3号1920.11.52頁。影印本による。『青木正児全集』第2巻春秋社1970.7.20.240頁）。関連部分を紹介すれば、こうなる。

青木は、王敬軒の文章を『新青年』に見いだした。銭玄同がなりすました架空の人物だ。それが捏造書簡であるとは、青木は知らない。王敬軒が実在していると考えた。真相が明らかになるのははるか後のことだ。青木がだまされるのも当然だといえよう。青木は解説して「彼（王敬軒）は古文小説家林紓の為に熱心なる辯護を試み」、とこれが「逆流」だという。ならば、王敬軒に連なって林紓が存在している。頑固な旧派が林紓だという青木の認識なのだ。

青木論文に「激発され」た松枝が、林紓に対して悪印象を持ったとしても不思議ではない。

#### 小川利康の注釈

創元社の『瓜豆集』からかぞえれば、ほとんど70年を経て該当部分の注釈が書かれた。研究は、進んだのか。

前出の小川利康編「周作人・松枝茂夫往来書簡 戦前篇（2）」である。注釈を引用する。

注7 ユーベルとは『探偵ユーベル』（ヴィクトルユーゴー作、森田思軒訳、民友社一八八九年）のことを指す。林訳小説の中には見あたらず、漢訳は不詳。32-31頁

林紘の翻訳ではないから、見あたらないのは当然だ。私の知る限り、漢訳はなされていない。ここでいっているのは、森田思軒\*2の日本語翻訳作品である。

周作人のその部分をよく読んでほしい。

「そのほかユーゴー（Victor Hugo）の探偵談みたいな短篇小説で『ユーベル』とか何とか云ふのがあつたが、非常に面白く書けてみた」

ここは、これで独立している。ほかの箇所とはかかわりがない。林紘の翻訳でもないし冷血とも関係はないのだ。周作人も読んでおもしろかったというだけのこと。ただ、ユゴーでつながる。

ユゴーといえば、魯迅の翻訳が自然に浮かんでくるだろう。

（法）囂俄著、庚辰（魯迅）訳「哀塵」（『浙江潮』第5期 光緒二十九年五月二十日 1903.6.15）だ。この原作は、ウヰクトル、ユーゴー著、森田文蔵訳「フハンティーンFantineのもと（一千八百四十一年）」（『国民之友』第26号1888.7.20）ということもわかっている。ただし、これには中島長文による非魯迅翻訳説がある\*3。

森田の該翻訳は、ユゴー作品集に収録された。それが、森田思軒重訳『ユーゴー小品』（民友社1898.6.4）だ。これを見れば、「探偵ユーベル」もある。ということは、周作人が読んだのはこの『ユーゴー小品』であった可能性もある。

小川の注釈をつづける。

注8 林訳小説の一種『黒太子南征録』（英国<sup>コナン・ドイル</sup>柯南・ドイル、林紘、魏易合訳、一九〇九年）。周作人の説明にあるハガード、続く書信に見えるスコットも誤り。

『仙女縁』という書名は存在せず、書名から類推すると、おそらく『荒唐言』（<sup>エドモンド・スペンサー</sup>伊門斯賓塞爾、林紘、曾宗鞏合訳、一九一四年再版）が該当すると思われる。同書の原題は、Faerie queene（邦題名『妖精の女王』）であり、内容的に最も近い。あるいは題名として近い『金梭神女再生縁』（英国<sup>ママ</sup>哈葛德著、林紘、陳家麟合訳、一九二〇年）か。このほか回答で言及していない『白雲塔』も未詳。31頁



『黒太子南征録』は、コナン・ドイル Conan Doyle の “ The White Company ” が原作だ\*4。そこまではよろしい。

つぎが問題だ。

小川は、『仙女縁』が林訳作品だと勘違いしている。松枝茂夫が冷血を林紓だと思ひこんだのを踏襲したらしい。松枝の思考に深く影響されたのだろう。残念なことだった。

林訳だと考えるから、「書名から類推すると、おそらく『荒唐言』」などと荒唐無稽な説明になってしまった。

あるいは、『金梭神女再生縁』だとすれば刊行は1920年ではないか。民国になって林訳とは離れた魯迅だったから、年代があわない。五四事件直前の林紓を批判した魯迅である。ありえない。該書の原作については興味深いことがあるが、本稿とは関係がないので書かない。

では、冷血陳景韓（1877-1965）\*5の作品で「仙女縁」があるかといえ、これは該当するものがない。

ただし、これかと推測できる翻訳はある。（法）囂俄著、冷訳「賣解女兒」（『小説時報』第9期 宣統三年三月二十日1911.4.18）だ。

冷は、冷血と同じく陳景韓の筆名にほかならない。原作は、ユゴーの「ノートルダム・ド・パリ Notre-Dame de Paris」という。同じユゴーならば、状況からいって合致する。周作人は記憶違いすることがあるから、これもそうではなかろうか。

もうひとつの『白雲塔』は、翻訳がある。

冷血訳『白雲塔（一題新紅樓）』（有正書局 光緒三十一年1905）という。原作は、押川春浪『伝奇小説 銀山王』（東京堂1901.6、博文館1903.6）と目録にある。

## 結 論

増田渉は自分のがのめり込んだ魯迅を通して林紓を見た。魯迅は、林紓のことを「ファシスト」と罵っている。

松枝茂夫は自分のがのめり込んだ周作人を通して林紓を見た。周作人は、林紓の死去にあって「文学革命」以後、人々はみな林氏を罵る権利をもつことになった」と罵っている。

魯迅と周作人は、ふたりともに林紓という人物を敵視していた。増田と松枝の見方に影響をあたえなかったはずがない。

増田と松枝のふたりは、ともに周氏兄弟という色眼鏡を通して林紓を見たということをおはいいたいのだ。

林紓に対するよくない印象は、のちのちまで松枝茂夫のなかで消えることはなかった。

1987年の座談会「松枝茂夫氏を囲んで 紹興、魯迅そして周作人」(飯倉照平、木山英雄『文学』1987.8.10。のち改題して前出『松枝茂夫文集』に収録)において松枝は次のように発言している。

それから王羲之の住居跡が王家山というんですが、その近くに筆飛街といって王羲之に由来する名前の街があるんですよ。その筆飛街に蔡元培の生まれた家がある。ごく狭苦しい小さな家で、進士及第の額のそばに簔と笠が下がっていたのが面白かった。蔡元培は下層階級の生れで、李慈銘の玄関番をして刻苦勉強したんだといえますね。林琴南が北大校長蔡元培にあてた手紙に、白話のことを罵って、「引車売漿者流が操る所の言」といっていますね。この引車売漿者流とは、白話運動に好意を寄せている蔡元培の出自をほのめかして、あてこすっているような気がするが、ちがうかな。47頁

同席している飯倉、木山のふたりとも、松枝の発言について特に反応を示していない。林紓が「蔡元培の出自をほのめかして、あてこすっている」ことを認めているのだと考える。

この松枝の発言は、1975年に日本で公表された魯迅の書簡がもとになっているのではないか。魯迅から山上正義にあてた日本語の手紙(1931年3月3日付)だ。丸山昇によって詳しい注釈がつけられている。

魯迅はその手紙のなかで、林紓が蔡元培の父親をあてこすった、と説明した。

それ以後、ほとんど定説になっている。だが、これは違う。

確かに、魯迅は林紓が蔡元培の父親をあてこすったと受け取った。だが事實は、林紓ではない別人が中傷したのだ。それを、林紓が行なったことにして、魯迅は何も知らない山上正義に教えた。魯迅が引き起こした林紓冤罪事件なのである\*6。

あてこすった対象は蔡元培自身か、それとも彼の父親か、微妙に異なる。だが、あてこすったと受け取ったのは松枝も同様だ。1975年公表の魯迅書簡が根拠でなければ、松枝が独自に感じたものかもしれない。そうであったとしたら、林紓に対

する反感が長く深く松枝の中で息づいていた証拠となろう。

残念ながら、林紓につながる日本人は、当時いなかった。だから誰も弁護しない。今も、いない。あるのは、林紓に対する罵倒だけだ。だからこそ私はそれを称して「林紓を罵る快樂」という。

研究者の全員が痛罵している人物を研究対象に選び取るひとは、めったにいない。林紓にとっての不幸であろう。林紓に関して日本人がほどこす注釈が不正確であるのは、それが原因のひとつではなからうか。 罫

【注】

- 1) あとから気づいた。山田敬三『魯迅の世界』（大修館書店1977.5.20）に指摘がある。333頁。もしかすると、ほかにも言及した論文があるかもしれない。そのばあいにご容赦願いたい。
- 2) 森田思軒研究会『森田思軒とその交友 龍溪・蘇峰・鷗外・天心・淡香』松柏社2005.11.30
- 3) 中島長文「「哀塵」一篇は魯迅の訳する所に非ざるを論じ兼ねて「造人術」に及ぶ」『颯風』第38号2005.3.28
- 4) 前出の山田敬三は、ドイルの『ナイジェル卿』43頁、*Sir Nigel* 333頁と誤る。
- 5) 樽本照雄「膺作ホームズ失敗物語 陳景韓、包天笑から劉半農、陳小蝶へ」『清末翻訳小説論集』所収
- 6) 樽本照雄「魯迅による林紓冤罪事件 「引車売漿者流」をめぐって」『林紓冤罪事件簿』所収

(さわもと きょうこ)